

2015年11月21日

日本カレドニア学会

2016年第1回研究会のお知らせ

日本カレドニア学会では、19世紀ヴィクトリア朝時代に小説から詩さらに文芸評論に至る幅広い著作を残したウィリアム・シャープをテーマに、2016年第1回研究会を開催いたします。シャープは本名とフィオナ・マクラウドという女性名の二つを用いて文学活動をした異色の作家であり、概ね本名では知的で客観的な自己を、また女性名のフィオナ・マクラウドではケルト的想像力を礎に直観的で霊的な自己を、両性の視点から表現したことで知られています。つきましては、2016年第1回研究会を下記の要領にて開催いたします。ふるってご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

日時 : 2016年1月23日(土) 15:00～16:30
会場 : 拓殖大学茗荷谷校舎(東京メトロ・丸ノ内線 茗荷谷駅下車、徒歩5分)
E館-601教室

発表者: 有元 志保氏 (静岡県立大学短期大学部)

論題 : ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品にみる分身の変遷

要旨 : ウィリアム・シャープ (William Sharp, 1855-1905) はペイズリーに生まれてグラスゴーに学び、詩人、小説家、編集者、伝記作家などとしてロンドンを中心に活動した。シャープは本名に加え、フィオナ・マクラウド (Fiona Macleod) としての著述や、その異名の下での人々との交流を10年以上継続したことで知られる。二重生活を実践したとも評されるシャープの、自己の多層性に対する関心は、初期から晩年に至るまでの彼の作品に大きな影響を与えている。本発表ではシャープ、マクラウド両名義の作品に共通するモチーフの一つである分身に注目する。一般的に、文学作品において分身に遭遇する人物はしばしば、第二の自己との邂逅を希求しつつも恐れるという、相反する心理を抱えているとの指摘が存在する。シャープの作品においても分身の出現がもたらす不気味さや、主体である人物が陥る自己喪失の危機が繰り返し語られる一方で、分身への憧憬も表現される。マクラウドとしての活動の進展に伴い、両名義の詩や短編、小説における分身の描かれ方がいかなる変遷を辿ったかを検討するとともに、シャープの重層的な自己意識と、後期ヴィクトリア朝という時代やスコットランドの地域性との関連についても考察できればと考えている。

有元 志保氏 専門分野:19世紀イギリス小説

著書、論文など:

『男と女を生きた作家——ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯』
(国書刊行会、2012年) 等

研究会終了後、大学近くで懇親会を開催する予定です。